津市立南が丘小学校だより
かがやく未来
2024. 10. 23　NO 33

当たり前に縛られず…

　最近、藤井聡太七冠の師匠　杉本昌孝（八段）さんの話を聞く機会がありました。そこで藤井　七冠の幼少期からの育ちや育成についての話を聞くことができました。

　それはさておき、私は少し前に「藤井曲線」という言葉を知りました。AI（人工知能）による形勢判断のグラフが藤井七冠の対局では中盤から後半にかけて藤井七冠に優勢を示すように曲線を描くことが多いそうです。この曲線を「藤井曲線」というそうですが、藤井七冠に敗れた棋士の多くが「自分のどの手が悪かったのか分からない」と感じるそうです。藤井七冠は７年前に２９連勝を達成し、話題となりました。その強さは読みの深さであることは言うまでもありません。藤井七冠は持ち時間を最大限に使うということも聞かせていただきました。「もうこれ以上良い手はないか…」とじっくりと考えているのかもしれません。

　将棋では昔からの研究によって最善とされる手のことを「定跡」と言いますが、藤井七冠はこの定跡を使わず、異なる手を使いながらも結果的にはそれが勝ちの要因となることが多いそうです。思考を固定せず、定跡（これまでのやり方）にとらわれないことが読みの深さにつながっているといえるのではないでしょうか。

　このことは単に将棋界のことだけでなく、一般社会においても（特に学校教育は…）通用することではないでしょうか。近年、コロナ禍を経験し、“テレワーク”や“ネットショッピング”という言葉が多く使われるようになりましたが、今、社会システムや価値観が大きく転換しました。今後数年後には、子どもたちが大人になる頃には今ある職業の何割かがなくなり、新たな職業が生まれてくると言われています。急速なテクノロジーの進化、世界的な気候の変動、国際状況の変化、価値観の多様化などこれまで通りの定跡では対応できなくなっています。知識の獲得だけにとらわれず、どうやって他者とともに協働しながら問題可決にあたっていくかという力をつけていかなければなりません。学校もこれまでの“当たり前”に縛られず、柔軟な思考で“今、何をすべきか”などを検討していくことが大切であると思います。まずは私自身の思考を変えていかなければならないと常に思っています。